

中田兼介著 『もえる！いきもののりくつ』

(ミシマ社)



いきものたちの驚くべき生態と「りくつ」を解説した本。といっても、学術用語の並ぶ難解なものではなく、クスツと笑えたり、しんみりしたり、「こういう人っているよね」と思えたりする柔らかいエッセイ集である。いきものたちが生きるため、また、子孫をのこすためにどんなことをしているのか、世界各地の動物行動学者による最新の研究をわかりやすく紹介してくれる。

例えば、クロソラスズメグイという魚は農業をするし、オオニワシドリという鳥はプロポーズのために技巧を凝らした舞台をつくるとのこと。また、これまで諸説のあったシマウマの縞もようについて新説が載っている。あの縞々のお陰でシマウマは……、やっぱり書くのを遠慮します。ぜひご自分で読んで感動を味わって下さい。

紹介されたいきものの生態が素晴らしいのはもちろんのこと、粘り強い観察や実験により、それを世に知らしめた「研究者」といういきものの素晴らしさもひしひしと伝わって、胸が熱くなる。

(伊沢 玲)

柳田理科雄著 『空想科学読本』(I)~(III)

(KADOKAWA 二〇二二年)



『アルプスの少女ハイジ』という児童文学がある。日本では原作よりアニメでよく知られている。アニメのオープニングで、ハイジはアルプスの山々を背景に長いブランコを気持ちよく漕いでいる。画面に映るスイスの牧歌的な風景に目を奪われ多くの子供はあの長すぎるブランコをさほど気に留めなかっただろう。だが柳田氏は違った。小学生の時にこれを見て不思議に思い、高校の物理で振り子の原理を学ぶと、周期を基に計算して長さは41メートル、最高速度は時速82kmという現実的ではない数字を導き出した。

他にも『ドラえもん』がタケコプターで飛ばうとすると、タケコプターは頭皮だけ剥いで飛んで行ってしまふとか、童話『おおきなかぶ』のかぶは14トンもあるとか、童話や空想の世界をまじめに科学的に論じていて面白い。

人が見過ごすような事象に目を向け科学的に考えるところに惹かれるが、そのまま歌作に取り入れようとすると理屈っぽくなるので危険だ。因みに「理科雄」が本名であることにも妙に納得させられた。

(森田治生)